

第10回 中野区ゆかりの著作者紹介

巽聖歌と新美南吉

—友情と名作を育んだ上高田—



展示期間 2013年11月30日(土)～2014年1月30日(木)

中野区立中央図書館

目次

はじめに	1
聖歌と南吉略歴	2
エピソード1 聖歌と南吉の出会い	
2人が関わった児童雑誌	4
エピソード2 聖歌を信頼する南吉	7
とりまく人々	8
北原白秋・鈴木三重吉・与田準一・薮田義男・柴野民三・歌見誠一 清水たみ子・河合弘・江口榛一・野村千春・中川一政・宮柊二・渡辺茂	
生活圏	15
エピソード3 複雑な南吉	
エピソード4 南吉の死とその後	19
巽聖歌・新美南吉年譜	22
ガラスケース内展示資料	27
関係資料リスト	30

展示概要

期間：2013年11月30日(土)～2014年1月30日(木)

場所：中野区立中央図書館 一般開架特設コーナー・正面玄関前ガラスケース

表紙：展示全景（職員撮影）

はじめに

「かきねの かきねの まがりかど」で始まる童謡『たきび』は、日本の唱歌として今も多くの
人々に歌い継がれています。昭和初期に作られたこの歌は、詩人・巽聖歌が当時住んでいた中野区
上高田の落ち葉炊きの風景を見て作詩したと言われています。

詩人として多くの作品を残した聖歌は、『赤い鳥』や『チチノキ』といった児童文学雑誌の出版
にも携わり、妻で画家の野村千春をはじめ、新美南吉、北原白秋、与田準一、柴野民三、薮田義雄、
宮柊二など、様々な作家や文学者たちと関わりがありました。

中でも『ごんぎつね』などの作品で知られる童話作家・新美南吉との交流は深く、聖歌は出会っ
た当時まだ無名だった南吉の作品を高く評価し、故郷を離れ上京してきた南吉を自宅に住まわせて
います。南吉はその後の約4年間を上高田周辺で過ごし、聖歌と関わりのあった作家や文学者たち
とつながりを持ちました。南吉の死後も、聖歌は彼の作品を世に出すために尽力し、多くの作品や
全集を刊行しました。

この展示では、巽聖歌と新美南吉および関係人物の著作を中心に、当時の中野の様子などを紹介
します。



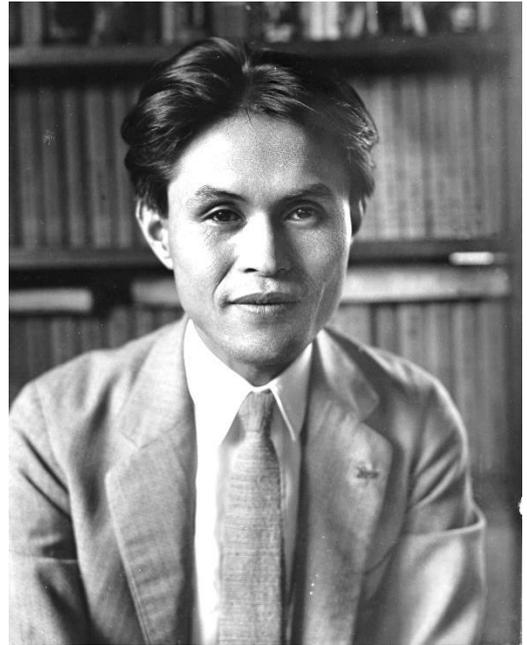
たつみせいか

巽聖歌

明治 38(1905)年 2 月 12 日～昭和 48(1973)年 4 月 24 日

詩人、歌人、編集者。本名野村七蔵。画家、野村千春は夫人。日露戦争のさなか、岩手県日詰町の鍛冶屋の七番目として誕生した。末っ子で、誕生したその年に、一番上の兄が戦争で負傷、父市兵衛が亡くなっている。大正 6 年に小学校を卒業し、兄が継いだ鍛冶屋の手伝いをしながら、詩や童謡を雑誌に積極的に投稿している。

大正 12 年に『少年』『少女』を刊行していた時事新報社に就職を希望し上京した。当時の編集者も才能を認めていたが、年齢が足りないために横須賀の海軍工場に勤めて時を待った。大正 13 年には時事新報社に入社できたが、わずか一年で「徴兵検査」を理由に帰郷、巽聖歌のペンネームで『赤い鳥』に投稿しながら日々を過ごした。翌大正 14 年『赤い鳥』10月号で「水口」が

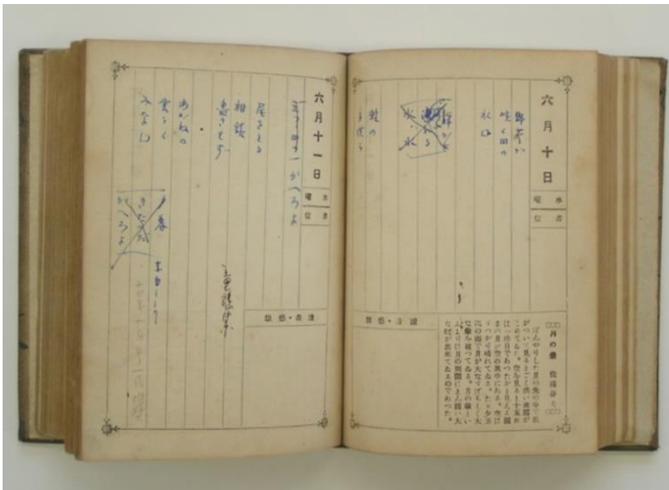


上高田で暮らしていた頃の巽聖歌

提供：日野市郷土資料館

推奨作品になり、北原白秋に「めづらしいほどにいい」と激賞された。昭和 5 年には与田準一と同人誌「乳樹」を創刊。同年、南吉が東京外国語学校に入学すると同居、以後親交が続く。昭和 16 年「たきび」が JOKA ラジオの「歌のおけいこ」で渡辺茂作曲によって放送され、長く愛唱される。昭和 31 年から小学校国語教科書の編集に携わり、聖歌は『国語 4 年 1』（昭 31・大日本図書）に南吉の作品「ごんぎつね」を教材として推した。昭和 35 年『新美南吉童話全集』全 3 巻を刊行、翌年産経児童出版文化賞を

受賞。昭和 48 年心不全のため死去。



大正 14 年日記 水口草稿

日記帳には水口以外にも多数の作品の草稿が書かれており、日記というよりは作品ノートのように使っていたようだ。

提供：日野市郷土資料館

聖歌の性格

聖歌は郷里・岩手県の日詰教会の牧師とともに、福岡県久留米市の教会へ家庭教師として赴任したことがあり、キリスト教にも理解が深かった。優しく、面倒見の良い聖歌の周囲には人が集まり、南吉も聖歌を兄のように慕っていた。

にいみ なんきち

新美南吉

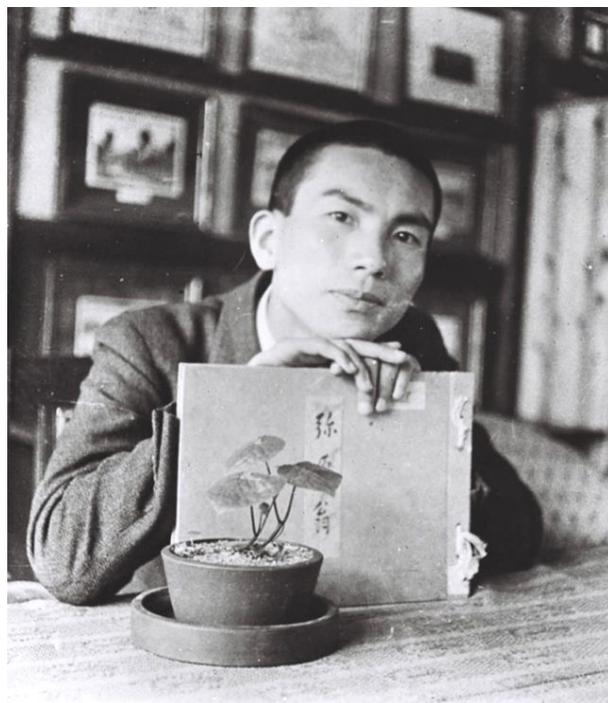
大正2(1913)年7月30日～昭和18(1943)年3月22日

作家。本名 正八^{しょうはち}。愛知県知多郡半田町（現半田市）で畳屋の次男（長男は夭折^{ようせつ}）として誕生した。南吉がまだ4歳の時に母は亡くなり、その一年後に父親は後妻志んを迎え、弟の益吉も誕生している。家庭の事情で小学2年生の時、実母りゑの実家である新美家の養子となった。祖母と二人きりの生活に馴染めずに畳屋に戻ったが、籍は亡くなるまで新美家に置いたままであった。小学校では成績優秀で、文学の才能もこの頃から見せている。また、地元半田市の中学に通っていた時に『赤い鳥』に作品が入選、聖歌を頼って上京する。後の昭和7年に、東京外国語学校英語部、現在の東京外国語大学に入学。

（以後表記を東京外語とする）東京外語時代には聖歌を中心に与田準一、清水たみ子などと交流を深めた。

昭和11年に東京外語卒業。麹町区（現千代田区）

丸の内の雑貨貿易協会に勤務するが、10月咯血、病床にふす。学生時代に続き2回目の咯血だった。昭和13年に中学校教員免許状を取得し、4月から安城高等女学校の教員となる。生前、『良寛物語 手鞠と鉢の子』（昭16・学習社）、『おじいさんのランプ』（昭17・有光社）の2冊の本を残した。昭和18年「狐」を書きあげたが、病状が進行、協会を退職。聖歌の見舞いを受けるも声が出せず、退職1か月後に死亡。喉頭結核であった。



都築弥厚の資料を手にする南吉

安城高等女学校の郷土室にて。都築弥厚の伝記執筆を考えていた様だが、完成することはなかった。

提供：新美南吉記念館

南吉の性格

南吉は無口で、まじまじと人を見る癖があったと聖歌は振り返っており、同門の宮柊二は南吉がいると怖くて家に入りづらいと聖歌に漏らしていた。東京外語の友人であった河合弘も、無口で大人びた印象を受けたようだ。社交的な性格ではなかったが、半田の近所に住んでいた子守役の森はやみや、聖歌・千春夫妻など、親しくなった相手には人懐っこく接する面もあった。

白秋の指導のもとで『チチノキ』を発行するようになった聖歌は、『赤い鳥』で毎号のように白秋に称揚される「愛知県半田町岩滑・新美南吉」に注目していった。その後『チチノキ』同人に加入申し込みをしてきた南吉に対して、聖歌は昭和6年9月に手紙を書いている。何通かのやりとりをした後、南吉は昭和6年12月21日に東京高等師範学校の受験のために上京、下北沢にあったミハラシ館という下宿屋に行き、白秋の秘書役をしていた藪田義雄、『赤い鳥』編集の与田、アルス社の聖歌といった白秋門下の俊秀たちと出会った。また、聖歌の手引きで世田谷の砧きぬたの自宅にいた白秋にも会いに行っている。聖歌の勧めもあって東京外語への入学を決めた南吉は、帰郷後すぐに両親を説得し、昭和7年3月に受験に合格、同年4月から9月までの5カ月間を上高田の聖歌の家に寄寓きぐうして学校に通った。



2人が関わった児童雑誌

『赤い鳥』

大正7（1918）年7月～昭和11（1936）年8月

鈴木三重吉が、それまでの日本の児童読物を「功利と、センセーショナルな刺激と、変な哀傷にみちた下品なものだらけ」と位置づけし、「世間の小さな人たちのために、芸術として真価のある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起こしたい」という理念のもとに大正7年7月に創刊した児童文学雑誌。

当時の文壇で著名であった北原白秋や森鷗外、泉鏡花、高浜虚子、島崎藤村、小川未明、野上弥生子、芥川龍之介などの賛同も得た。

『赤い鳥』に発表された主な作品としては、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」「杜子春」「アグニの神」、有島武郎「一房の葡萄」、宇野浩二「露の下の神様」、小川未明「黒い人と赤い櫓」「月夜と眼鏡」「飴チョコの天使」、豊島与志雄「手品師」「天下一の馬」「天狗笑」、菊池寛「一郎次、二郎次、三郎次」「納豆合戦」などがあげられる。

刊行は昭和4年2月に経済恐慌の煽りを受け一度休刊し、その後昭和6年1月に復刊されるが、昭和11年、三重吉の死によって終刊となった。

巽聖歌も執筆に参加しており、『赤い鳥』に発表された童謡は「水口」「子雉」「お山の原っぱ」など。

新美南吉は『赤い鳥』に多くの投稿を寄せ、入選作品には「ごんぎつね」「のら犬」「窓」など、童話4篇・童謡23篇がある。

昭和8年5月、三重吉との確執から白秋が『赤い鳥』と決別し、聖歌・南吉を含む白秋門に集う若い作家たちも『赤い鳥』への投稿を止めざるを得ない事態となった。

『チチノキ』

昭和5（1930）年5月～昭和10（1935）年5月

昭和4年2月の『赤い鳥』一時休刊を受け、『赤い鳥』を心の拠り所としていた聖歌が白秋の勧めで与田とともに創刊した童謡同人誌。当初の題名は『乳樹』で、5冊目以後『チチノキ』と改題した。全19冊刊行。『乳樹』という題名は「乳の樹よ、童謡の樹よ、また母の樹よ、牝牛の樹よ」という白秋の言葉から命名されたものである。

『チチノキ』は、投稿という形式にこだわらずに、同人たちが自由に作品を発表していく雑誌となった。次の時代の童謡を牽引するべく、新しい童謡を模索していた点で、高く評価されている。聖歌はこの雑誌で、ペリカンや蝶番など、題材に新しさを取り入れた作品を載せているが、作品を作成する事よりも童謡を論じる事に力を入れていた。雑誌全体としても、評論やエッセイなどに多くのスペースを割いている。

多胡羊歯・真田亀久代・柴野民三・歌見誠一などが同人として参加している。

『新児童文化』

昭和15（1940）年12月～昭和17（1942）年5月

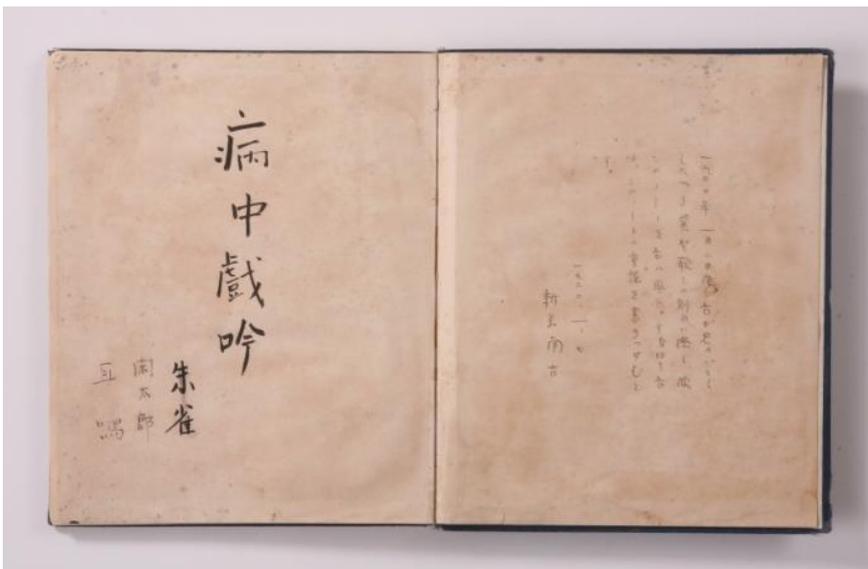
巽聖歌自身が、責任編集をつとめる児童問題総合雑誌として創刊した。第一巻の冒頭に「新しき児童文化の研究指導・批判評論に重点を置く」と記した様に、内容は童話や詩・童謡だけでなく、児童文化の評論、時評なども掲載され、新しい時代の児童文化の建設を目標とした。当時は戦時特別体制だったため、第4冊で刊行は終了。聖歌と与田をはじめ、小川未明、坪田譲治、清水たみ子、多胡羊歯などの児童文学者が作品を寄せた。また、南吉はこの雑誌に発表した「川」や「嘘」といった作品が注目され、童話作家として認められるきっかけとなった。

聖歌はこの年に昭和4年5月から勤めていた出版社アルスを退職しており、以後は自立した児童文学者として仕事をする事となる。

昭和8（1933）年に南吉は、後期『赤い鳥』メンバーの、高麗弥助^{こまやすけ}と真田亀久代^{だんかん}と共に回覧誌（※）『風媒花^{ふうばいか}』を発行した。『風媒花』について南吉は断簡「しづかな村」の中で、「誌名について、真田さんから『月と胡桃^{くるみ}』の「胡桃」だけをとってつけたらどうかとお話がありましたので、巽さんにお話しして見ましたら、「胡桃」は古い、むしろ高麗さんの散文のタイトルがよい、と云われましたので、高麗さんにことはりもせず、『風媒花』と命名しました。」と書き、日記にも「回覧第一回誌を巽の所へ持って行って見て貰ったら僕の作品が、ぐつとすぐれてゐると云つた。」と記している。聖歌を信頼して相談した事が窺える。

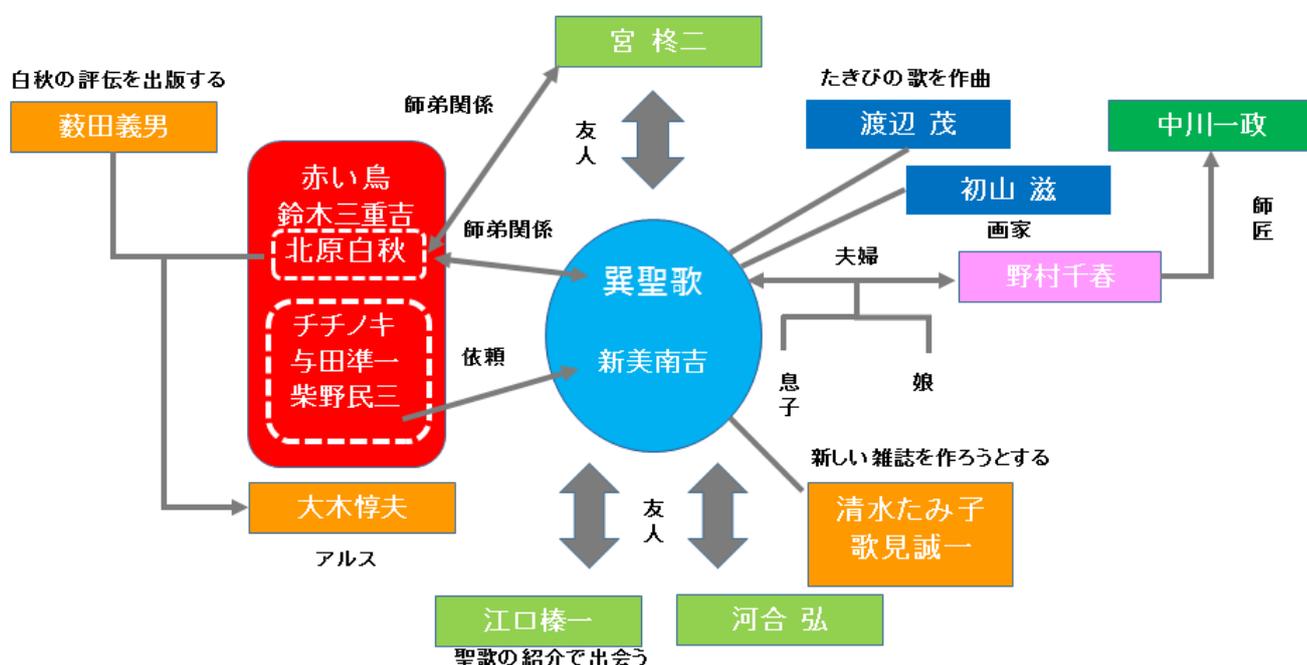
また同年南吉は、『チチノキ』から離脱している若手同人たちが制作した『チクタク』から柴野民三を引き抜いて、歌見誠一、高麗弥助などとともに新たな同人誌を発行しようと考えた。6月1日の日記に、「セイカに5円借りなければならなくなつた。運動雑誌を出せとすゝめられて出してみようかと思つた」と書いている。運動雑誌を出すように勧めた人物は分かっていないが、聖歌は理解を示していたようである。しかし同年12月24日に、聖歌に連れられて訪れた白秋の家で、新しい同人誌の構想を話したところ、白秋から時期尚早と言われ、この運動雑誌は取りやめになった。

※回覧誌というのは、自筆原稿を持ち寄り、それに表紙・目次等をつけて製本したもので、印刷はせず、奥付などはない。



半田へ帰る時に巽聖歌からもらった「アルスノート」への書き込み 提供：新美南吉記念館

とりまく人々



きたはらはくしゅう 北原白秋

明治 18(1885)年 1月 25 日～昭和 17(1942)年 11月 2 日

詩人、歌人。本名隆吉。福岡県山門群沖端村に、父長太郎、母しけの嫡男として生まれた。大正 7年 7月『赤い鳥』の創刊に際し、鈴木三重吉の依頼で、童謡の制作と応募童謡の募集を引き受け、以来、死の直前までに、1200編を越す童謡作品を残すとともに、多くの優れた童謡作家を養成している。

聖歌は『赤い鳥』に投稿した事がきっかけで、白秋門下生となる。特に「水口」は白秋の絶賛する所となり、聖歌も「タツミクンのおかげで、赤い鳥の童謡が確立した。とってくれた」と回想している。（『「赤い鳥」復刻版・投稿した頃』）白秋が様々な紙面に「水口」を紹介したことで、聖歌は自信を深めていったようだ。その後、昭和 10年に白秋主宰の短歌雑誌『多磨』が創刊されると、聖歌は同人となり、同 15年の東北旅行にも一緒に参加した。その際に聖歌は、日詰にいた母トメに会ってもらい、白秋の弟子として活躍している自分の姿を母に見せた。白秋もこの対面にとっても感銘を受けた様である。また、上京してきた南吉も、聖歌の紹介で白秋が住んでいる世田谷きぬたの砧きぬたに訪問しに行った。その後、手紙で南吉はその時の事を「また砧の先生のお宅でお目にかか

つた時のことをくり返しくり返し思つてゐます」と書き連ねている。聖歌と南吉の二人にとって、白秋は大変大きな存在であった。



北原白秋らと日詰で

雑誌『多摩』の短歌会で行った東北旅行の際に異の出身地である日詰を訪れた。

前列向かって右から2番目が聖歌。

提供：日野市郷土資料館

すざき みえ きち
鈴木三重吉

明治 15(1882)年 9 月 29 日～昭和 11(1936)年 6 月 27 日

小説家、童話作家、雑誌編集発行者。広島市猿楽町生まれ。

大正 7 年 7 月、『赤い鳥』創刊号が登場、北原白秋「りすこりす小栗鼠」、島崎藤村「二人の兄弟」、芥川竜之介「蜘蛛の糸」を初め、三重吉の作も三編収めてあり、大好評を得た。後に『赤い鳥』の売れ行きは低迷、白秋との絶交や持病と闘いながら刊行を続けたが、肺ガンで死去、『赤い鳥』は昭和 11 年 8 月号で終刊となった。

三重吉は大変子煩悩だったが、自分の子だけではなく、近所に住む小さな子ども達を座敷にあげ、鳥や昆虫の話聞かせてあげたり、いたづらをする子どもを本気で叱ったりしてあげる優しい人物であった。しかし、仕事や私生活には大変厳しく、後年小島政二郎まさじろうに「私の知っている文士で、字間のアキにやかましかったのは、三重吉と森鷗外だった。」（『「赤い鳥」復刻版・三重吉二面』）と振り返られるほど、一つの題名にも間隔の取り方、文字の書き方、漢字の使い方に神経を使い、修正していった。南吉の代表作「ごんぎつね」も、南吉が「権狐」と書いたものを「ごんぎつね」と平仮名で表記したり、最初の読み手の紹介文を大幅に削るなど三重吉が様々に手を加えていった。今も読み継がれる「ごんぎつね」は、こうした三重吉の細かい補筆を得て発表されたものである。

よだ じゅんいち

与田 準一

明治 38(1905)年 8 月 2 日～平成 9(1997)年 2 月 3 日

詩人、作家、評論家。福岡県生まれ。『赤い鳥』に 39 編の童謡が入選し、聖歌らとともに赤い鳥童謡第 3 期を代表する詩人として北原白秋に認められた。著作に『山羊とお皿』（第一書房）などがある。

聖歌との接点は、大正 12 年に八女の下妻小学校代用教員となり自作を投稿する傍ら、活版刷りの雑誌『童詩』をつくって岩手県の聖歌の雑誌『紅雀』と交換しはじめた頃にさかのぼる。

昭和 2 年、福岡県久留米市の教会へ家庭教師として赴任した聖歌は、同年 4 月に福岡県瀬高町の準一を訪問。同年齢の二人は同じ白秋門下の童謡詩人として終生の友人となった。

昭和 3 年、聖歌、与田ら白秋門下の『赤い鳥』同人メンバーは「赤い鳥童謡会」を結成。その後、白秋のすすめで二人は上京するが、翌年 3 月で『赤い鳥』が休刊。与田は身体不調を理由に一時帰郷し、白秋の地方宣伝を手伝うようになった。

昭和 5 年 3 月に再び上京、聖歌とともに童謡同人誌『乳樹』を創刊する。昭和 6 年には上京した南吉と見晴館で出会い、この頃から南吉とも交流が始まった。当時の南吉の日記にもたびたび名前が登場し、南吉に童謡原稿のアドバイスをしたり、一緒に寄席に行ったり等、当時の二人の交流の深さをうかがわせる。

やぶた よしお

藪田義雄

明治 35(1902)年 4 月 13 日～昭和 59(1984)年 2 月 18 日

詩人、わらべ唄研究者。筆名大倉次郎。神奈川県生まれ。

小田原中学 3 年のとき白秋に師事して詩作に励み、雑誌『近代風景』などに詩を発表。昭和 13 年、最初の詩集『白妙の駅』をアルスから出版、以後多くの詩集を刊行した。また、白秋の身近で生活した体験と豊富な資料に基づいて『評伝北原白秋』（玉川大学出版部）を執筆。白秋の全生涯を浮き彫りにした評伝として高く評価されている。

東京世田谷区下北沢のミハラシ館という下宿屋に住んでいたが、そこへ同じ白秋門下の聖歌、与田も住むようになり、昭和 6 年に聖歌を頼って上京した南吉も在京中に滞在した。このころから南吉との交流もはじまっている。

昭和 7 年、聖歌が上高田に家を借り南吉と同居、その後、聖歌の結婚にともない南吉は東京外語の寮へ移るが、同じころ藪田も与田とともに上高田へ転居した。

その当時の南吉の日記には、聖歌らと藪田の家を訪ねるエピソードが綴られているなど、時折名前が登場しており、上高田へ転居後してからも聖歌、南吉との交流は長く続いた。

しばのみぞう

柴野民三

明治 42(1909)年 11 月 4 日～平成 4(1992)年 4 月 11 日

詩人、作家。東京市生まれ。東京・九段にあった大橋図書館（現・公益財団法人三康研究所附属三康図書館。現在は港区芝公園に所在）に 8 年間勤務。児童図書室担当。『赤い鳥』などに投稿し入選、白秋に師事した。『乳樹』同人。小川未明主宰『お話の木』創刊に際し大橋図書館を退職、編集に従事。童謡集や幼年童話集など多数の著書がある。

聖歌の著作『新美南吉の手紙とその生涯』（英宝社刊）の中に「（南吉の）在京中、柴野民三君、中安瓊三君などに頼んで東京見物をさせたりした」というエピソードがあり、この頃から南吉とも接点があった。

当時、与田が大橋図書館へ頻繁に通っており、本の借覧で柴野にも世話になっていたようである。また、東京外語の学生となった南吉も、与田に大岡越前守の話を書いてはどうかとすすめられ、資料を探しに大橋図書館へ通っていた。

その後、小林純一らとともに『チチノキ』から離脱して同人誌『チクタク』を発行。南吉は『チクタク』同人から柴野らをひきぬいて歌見らとともに新たな同人誌をつくろうと考えたが、白秋から時期尚早と反対され、発行は幻となった。

うたみせいいち

歌見誠一

明治 44（1911）年（月日不明）～昭和 49（1974）年（月日不明）

童謡詩人。愛知県蒲郡市生まれ。蒲郡市職員を務める傍ら詩作に励み、三重吉が創刊した『赤い鳥』に童謡の詩を投稿、白秋に認められた。のち童謡同人誌『昆虫列車』に加わり、44編の童謡を制作。62歳で死去。死後、蒲郡市で第九の会の理事を務める伊藤健司いとう けんじにより44編の詩に曲がつけられ、「おぼろ夜」「コスモスの花のそばで」など4集の童謡楽譜集にまとめられた。

南吉とは同じ愛知県の出身。『赤い鳥』の投稿仲間、ともに『チチノキ』の同人であった。南吉が上京してからも交流があり、書簡を多く保存していた人物。

しみず たみ こ
清水たみ子

大正4（1915）年3月6日～

作家、童謡詩人。本名民。埼玉県生まれ。小学2年ごろから『赤い鳥』を愛読し、14歳ごろからは同誌に童謡の投稿を始めて、「夕方」ほか18編の作品が掲載されている。白秋の指導を受け、同誌廃刊後は聖歌、南吉、与田らと同人誌『チチノキ』に加わった。その後、編集生活をしながら『新児童文化』『コドモノクニ』に童謡や幼年童話を発表した。著作に『あまのじゃく』（国土社）、『ぞうおばさんのお店』（岩崎書店）などがある。

『校定新美南吉全集・第十卷』（大日本図書）の月報に「手紙のこと、日記のことな

春陽会展見学のために訪れた
上野公園で。

左から新美南吉・巽聖歌と
長男・周郷博・野村千春・
清水たみ子

提供：新美南吉記念館



ど」という題で上高田時代の南吉との思い出を寄稿している。

かわい ひろし
河合弘

大正4（1915）年（月日不明）～昭和56（1981）年（月日不明）

岐阜県大垣市出身。昭和11年東京外国語学校仏語部文科卒業。化学療法関係誌の編集、翻訳に携わり、傍ら多くの随筆や小説を綴った。南吉の外語時代の友人。著書に『友、新美南吉の思い出』（大日本図書）がある。

弘は『友、新美南吉の思い出』の中で、南吉が東京高等師範学校の受験に失敗したのは、万年筆を忘れたからという通説に対して、「当時わざわざ半田から受験のため上京しておいて、万年筆を忘れるような頓馬であるとは、とうてい考えられない。（中略）疑ってみれば、とにかく上京したかっただけではないだろうか」と批判している。また、上京をして聖歌という恩人を得た事につい

て「(前略) 目的は予期以上に立派に達成されたのであった。「兄さん」と呼びかける、かけがえのない恩人を得るのである。」と振り返っており、聖歌と南吉の関係については「(前略) 南吉は聖歌によって作られたと言えよう。」と書き残している。

「絶交」という形のまま、南吉の死により関係は終わってしまったが、東京外語で弘・南吉という友人をそれぞれ得たことは、二人にとって幸福であったと思われる。

えぐちしんいち

江口榛一

大正 3(1914)年 3 月 24～昭和 54(1979)年 4 月 18 日

詩人。本名新一。大分県耶馬溪生まれ。明治大学文芸科在学中に、聖歌の紹介で、東京外語の生徒だった南吉と知り合う。昭和 14 年に渡満して『はるびん哈爾濱日日新聞』の学芸部記者となり、南吉の童話「最後の胡弓弾き」「久助君の話」ほかを同誌に掲載。後年、後藤ごとうならね樽根主宰の同人誌『童話』に、「新美南吉論ノート」を発表した。昭和 54 年、自死。

『赤い鳥』が終刊した後、南吉を励ましながらか作品発表の場を斡旋している。江口は昭和 30 年に洗礼を受けたクリスチャンであり、貧しい人を救済する目的で、昭和 31 年から千葉県で「地の塩の箱」運動を始めた事でも知られている。晩年家計は大変苦しく、たび重なる不幸の後、自ら命を絶った。

のむら ちはる

野村千春

明治 41(1908)年 4 月 6 日～平成 12(2000)年 2 月 12 日

長野県諏訪生まれ。画家。春陽会、女流画家協会会員。童謡詩人の聖歌と結婚。児童文学者と交渉を持ち、南吉を世に送るために貢献する。児童書の挿画には、『新美南吉名作選』(羽田書店)、装丁・挿画では聖歌の『きつねのおめん』(海住書店)『たのしい詩・考える詩』(牧書店)ほかがある。

千春が彫刻のモデルを探しており、「彫の深い顔立ちの人」という条件にあった聖歌を紹介されたことが、二人の出会いのきっかけであった。その後、画家とモデルとして何度か会ううちに思いを寄せあい、千春は「絵を描かせてほしい」ということを唯一の条件として聖歌と結婚した。

児童文学者と画家の結婚生活には苦労も多かったが、「巽は絵を描くのに遠慮のいらぬ人でした」と語っているように、聖歌



野村千春と聖歌の彫刻

提供：日野市郷土資料館

は千春が絵を描くことに理解があり、二人で作品を製作したりしている。

なかがわかずまさ
中川一政

明治 26 (1893) 年 2 月 14 日～平成 3 (1991) 年 2 月 5 日

画家、随筆家、詩人。東京本郷西片町生まれ。大正 4 年岸田 きしだりゅうせい 劉生 と草土社を結成、のちの春陽会の創立に参加。油絵、文人画、書、陶器、いずれの分野においても独自の境地を拓き、新鮮な作風を打ち立てた。児童書の装丁や刺画も手がけている。

千春の師にあたる人物で、彼女の絵について、「女流画家ではあるが、女流の繊細とか優美とかに全く背を向けている」と評している。また、「彼女は信州生まれということから、色彩は寒国の色が見受けられる。質実・素朴である。いぶし銀の下から輝いてでてくる色彩は、彼女の魅力である。」とも評し、千春の才能を高く評価している。

みやしゅうじ
宮柊二

明治 45 (1912) 年 (月日不明)～昭和 61 (1986) 年 12 月 11 日

歌人。本名 はじめ 肇。昭和 8 年に白秋を訪ね、昭和 10 年『多磨』の創刊に参加、白秋の秘書となる。昭和 23 年、歌集『しょうこんしゅ小紺珠』を刊行。戦後派を代表する歌人としての地位を確立した。『多磨』解散後、昭和 28 年 3 月『コスモス』を創刊し、新人の育成に尽力。昭和 36 年刊の『多く夜の歌』で読売文学賞を受賞。『定本宮柊二短歌集成』（講談社）、『宮柊二集』10 巻別 1 巻（岩波書店）がある。

聖歌にとって柊二は弟弟子であった。柊二の叔父宮芳平 みやよしへい (画家) が、聖歌の妻野村千春が平野高等女学校に通っていた当時の美術教諭であったことから、二人の交流は始まったという。聖歌は雑誌『多磨』にて「北に向かふ作家一宮柊二君の『路』一」という文章を書いており、柊二に期待をよせている。また柊二の日記『宮柊二青春日記』を見ると、「野村さんのところで夕飯を御馳走になってくる。」などたびたび聖歌が登場し、親しい交友関係が覗える。

わたなべしげる
渡辺 茂

明治 45 (1912) 年 2 月 1 日～平成 14 (2002) 年 8 月 2 日

作曲家、音楽教育家。東京生まれ。東京の公立小学校の教員を昭和 47 年まで勤めるかたわら、童謡を作曲してきた。昭和 41 年発表の「たきび」（聖歌作詞）は最も知れわたった作品。最初、NHK の子ども番組で放送されたが、全国広く歌われるようになったのは、戦後になって音楽の教科

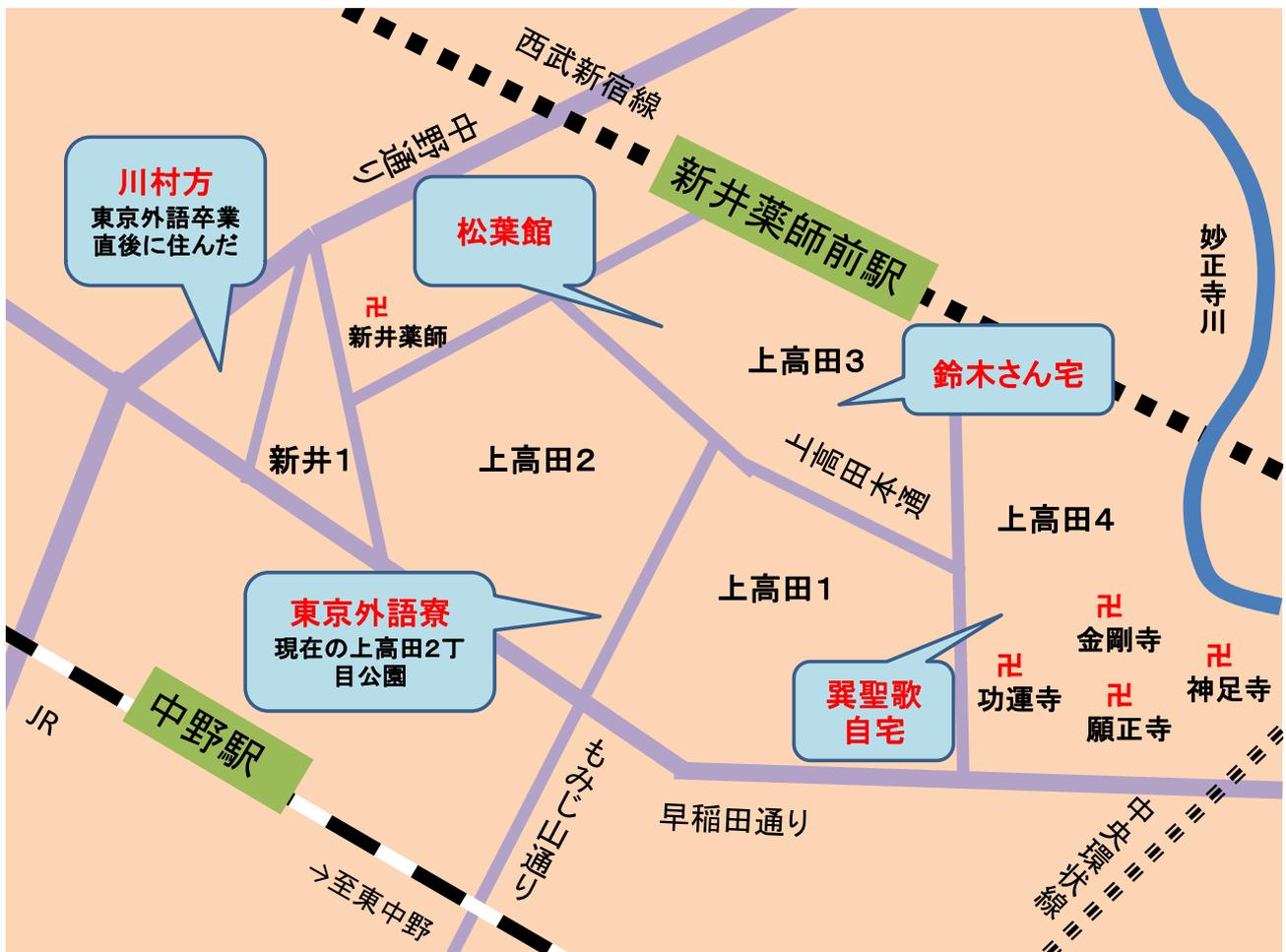
書に掲載されてから。昭和54年には保育の現場で現在なお人気のある大ヒット曲「ふしぎなポケット」（「保育ノート」7月号チャイルド社）を発表した。

昭和16年12月9日、初めて「たきび」がラジオで放送された。真珠湾攻撃があったのが、放送日前日。日米開戦の年だった。「たき火は敵機の攻撃目標になる」という理由で軍部からクレームがつき、二日で放送打ち切りになった。戦後、「たきび」はNHK「うたのおばさん」で復活し、音楽教科書にも採用されたが、今度は「街角でのたきびは困る」と消防庁からクレームがつく。以後、教科書の挿絵に、水の入ったバケツと、付添の大人が描き加えられるようになった。

聖歌は、「たきび」が有名になったのは「曲が良かったからだ」と渡辺の作曲を称賛している。



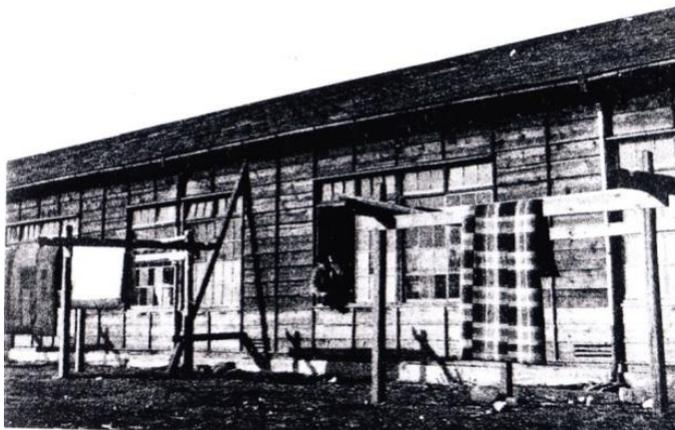
生活圏



巽聖歌自宅

下北沢にあるミハラシ館を出た巽聖歌は、南吉を受け入れるため、中野区上高田に新居を借りた。この家で南吉との生活が始まる。後に、与田や藪田もこの家に入出入りするようになり、交流を深めていくこととなった。聖歌と千春の結婚を機に、南吉は東京外語の寮に移る。その後も南吉の夕食を世話するなど、交流は続いた。

巽聖歌宅 提供：新美南吉記念館



東京外語の日新学寮

現在は、上高田二丁目公園になっている

提供：新美南吉記念館

昭和初期 妙正寺川を渡る西武電車。上高田付近

提供：中野区広報分野



新井薬師界限

聖歌と巽は、たびたび中野や新井薬師を飲み歩いている。南吉は酒が強い方ではなかったらしく、聖歌は自著に「五、六パイも飲むと、もういけなかった」と書いている。

聖歌は、大食いで甘党なのに太らない南吉に「酒を飲んだほうが、丈夫になるよ」と、ペパーミント酒を買い与えることもあったようだ。

南吉が下宿した川村方の三畳間

現在は取り壊されてしまった

提供：新美南吉記念館



松葉館にて、二度目の咯血…

外語を卒業し川村方を出た南吉が、次に住んだ下宿が松葉館である。その頃、神田小川町にある商工会館に勤めるようになっていたが、無理が祟ったのか二度目の咯血をしてしまう。昭和11年のことであった。

聖歌の妻・千春は二リットル瓶一本分くらいのスープや惣菜などを松葉館まで運び、献身的に看病したようである。

当時の中野駅・東中野駅

中野駅は、明治22年、新宿・八王子間に開通した甲武鉄道の停車場として開設された。当初、駅は現在よりも約100m西側の位置にあったが、明治35年に駅北側に軍事施設ができてから周辺が急速に発展、乗降客が大幅に増加したため、昭和4年11月1日に現在の位置に移設された。

また、明治39年に柏木停車場として開設された東中野駅も、中野駅同様、乗降客の増加により昭和3年5月に駅舎全体を改修増築している。南吉は東中野駅を利用していたようで日記にも、「朝

東中野の駅で、前田と云ふ半中出身で一級下だつた男とあつた。」（『新美南吉・青春日記』昭和8年6月23日）という記述が見られる。



左上：昭和4年 全面改築された、当時の中野駅

右上：昭和4年 中野駅南口風景

左下：昭和7年 新しい中野駅舎

提供：中野区広報分野

「たき火」のモデルとなった家

聖歌の自宅から歩いて十数分のところにある。風情のある垣根が続き、「たき火」のモデルとなった当時の面影を残している。垣根の門口には中野区教育委員会によって、『「たきび」のうた発祥の地』の看板が建てられている。

複雑な南吉



読書をする南吉 上高田で暮らしていた頃
と思われる

提供：新美南吉記念館

『新美南吉・青春日記1933年の東京外国語時代』で、この頃の南吉の複雑な心境が読み取れる。いくつかを挙げてみると…「セイカのところへ行ったら平川君がゐた。どうもセイカの所に入りびたっている様だ。かつての俺の位置にあるのだが、お嫁さんのみる今は余計にくからうぢやないか。」「昼の休みの時間に神田でセイカにあつた。(中略)彼とむきあっている時は、そんなに嫌に思はないが、別れた後彼の事を思うのが嫌な気がするのは、同じ芸術上の競合がもとか。」「セイカは童謡をすすめる。与田さんは大衆文学をすすめる。セイカは自分が童謡を去つてゆくことが、見すてられる様にさびしいのかも知れない。」「十時には聖歌が誰かの見送りに東京駅まで来るときいたが、与田さんのてまへ、さう子供子供することも出来かね、遂々あはずじまひだった。」と、聖歌と距離を置いて接しているように見えるが、その年の11月28日には「真田亀久代の「驢馬」より、俺の「道」の方が精神に於いてすぐれてゐると言ってくれたのでうれしかった。」と素直に喜びを記している。この頃南吉は、自分の作品も、病魔に侵されて痩せていく自分の体にも自信がなかった。そ

んな南吉を聖歌の言葉は温かく励ましたようだ。聖歌から自立したい気持ちと、頼りにしたい気持ちとが複雑に混ざっている。

南吉の死とその後

昭和18年3月、南吉は喉頭結核のため29歳で帰らぬ人となった。故郷の半田で病と闘っていた南吉は、死の間際、手紙とともに自身の未発表作品をまとめて聖歌に送り、出版を依頼した。手紙には、「生前(というのは、まだちょっと早すぎますが)には、実にいろいろ御恩を受けました。何等お報いすることのなかったのが残念です。」と記されており、これに驚いた聖歌はすぐに東京から南吉のもとへ駆けつけたという。そのときのやりとりを、のちに聖歌は次のように書いている。

「南吉は前の晩、ひどく咳が出た。それでもう死ぬかと思ったといった。誰もいない、こんな暗いところでひとりで死ぬのは、さびしいと思ったといった。それで、「今晚は、ここへ泊って、君といっしょに寝てやるよ」といったら、「なあに、あなたの顔を見たら、元気が出た。大丈夫です」と笑った。笑ったといっても、落ちくぼんだ目で、目だけの笑いになった。」（『新美南吉の手紙とその生涯』巽聖歌著・英宝社）

葬儀は4月18日に自宅で行われ、聖歌や与田らも参列した。

南吉の死後、すぐに作品の編集に取りかかった聖歌は、半年後、「手ぶくろを買いに」を含む童話集『牛をつないだ樅の木』を出版した。以降、聖歌は晩年まで南吉の作品を世に送り出す仕事に精力的に取り組んでいる。昭和31年には小学四年生の国語教科書に「ごんぎつね」が初めて掲載されたが、これも聖歌の強い推薦によるものであった。昭和35年、40年にはそれぞれ全集を出版。聖歌の尽力によって南吉の作品は広く人々に読まれるようになり、関心・評価も高まっていた。



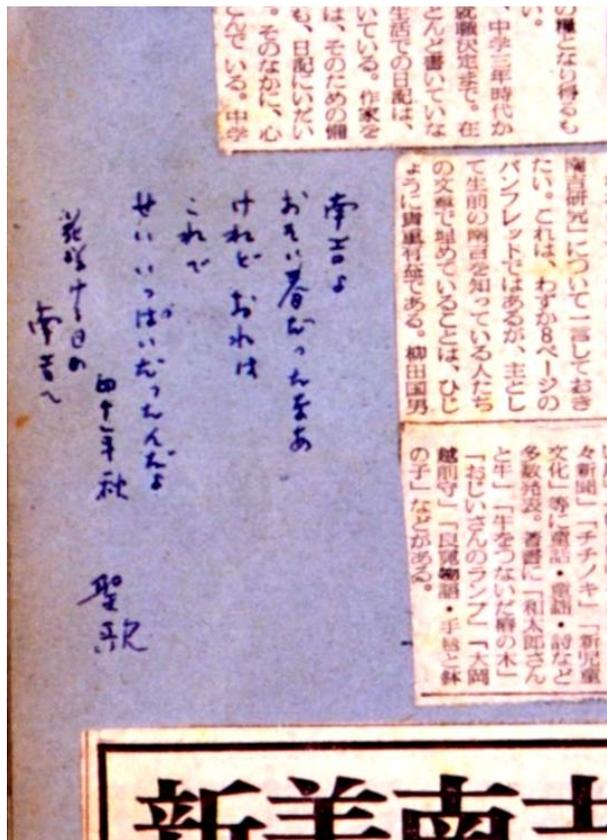
日野にて晩年の聖歌と愛犬

聖歌は犬好きで、代々犬に同じ名前をつけていたという。

提供：日野市郷土資料館



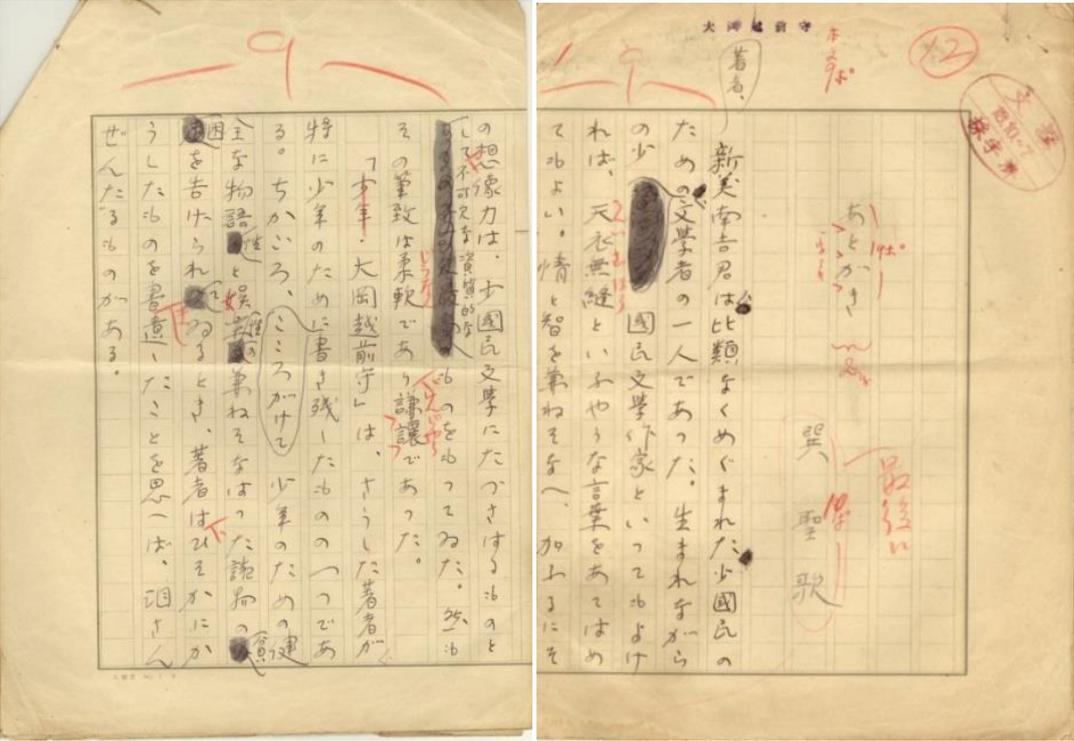
南吉の17回忌に半田高等学校を訪れた巽聖歌 提供：新美南吉記念館



南吉よ おそい春だったなあ けれど おれは これで
 せいっぱいだったんだよ
 四十年 秋 花咲ける日の南吉へ 聖歌

『新美南吉全集』刊行時、聖歌がスクラップに書いたメモ

提供：日野市郷土資料館



聖歌自筆『大岡越前守』あとがき原稿

提供：日野市郷土資料館

巽聖歌・新美南吉年譜

…巽聖歌に関する事項

…新美南吉に関する事項

明治 38(1905)年 2月 12日	岩手県紫波郡日詰町（現・紫波町日詰）にて誕生。本名・野村七蔵。
大正 2(1913)年 7月 30日	愛知県知多郡半田町字東山（現・半田市岩滑中町） ^{もなへ} 1にて誕生。 本名・渡辺 ^{しょうはち} 正八。
8月	孫文、日本亡命。
大正 10(1921)年 2月	叔父の新美鎌治郎(母り系の弟)病没。
7月	新美志も（り系の継母）と養子縁組し、新美正八となるも、祖母と二人きりの生活に耐えかね 12月に新美姓のまま父のもとへ帰る。
11月	原敬首相刺殺。
大正 12(1923)年	上京し、時事新報社に入社しようとするも、年齢不足のため横須賀の海軍 工廠に勤務しながら待機（翌年4月時事新報社入社）。
大正 14(1925)年	徴兵検査のため帰郷。巽聖歌のペンネームで「水口」などの詩を書く。
昭和 2(1927)年	このころから童謡や童話を創り始める。
3月	金融恐慌始まる。
7月	芥川龍之介自殺。
昭和 3(1928)年 8月	『赤い鳥』 同人の与田準一らと「赤い鳥童謡会」を結成する。
昭和 4(1929)年 3月	『赤い鳥』休刊。北原白秋の弟・哲雄の経営するアルス社に入社。 『兎の耳』、『少年倶楽部』などへ盛んに投稿。岩滑の有志とガリ版刷りの同人誌『オリオン』発行。このころよりペンネーム「南吉」を使い始める。
10月	世界恐慌始まる。
昭和 5(1930)年	与田準一らと童謡・童話雑誌『乳樹（チチノキ）』発刊。
9月	米価、生糸が大暴落。農業恐慌深刻化。
昭和 6(1931)年 1月	『赤い鳥』復刊。 最初の童謡集『雪と驢馬』を出版社ロゴスより発刊。

3月	田中学校(現・愛知県立半田高等学校)を次席で卒業。岡崎師範学校を受験するも身体検査で不合格。4月、母校の半田第二小学校の代用教員となり、そのかたわら雑誌『赤い鳥』に童謡、童話を投稿。童話「ごん狐」(昭和7年1月号)などの他、童謡8篇が掲載される。
9月	北原白秋門下による童話雑誌『乳樹』に参加し、巽聖歌を知る。 満州事変勃発。
12月	上京し、巽聖歌や北原白秋と会う。
昭和7(1932)年3月	満州国建国。
4月	東京外国語学校(現・東京外国語大学)英語部文科へ入学。 新美南吉と中野区上高田の家で同居を始める。
5月	五・一五事件
7月	初恋の女性・木本 ^{みな} 咸子と交際を始める。
9月	画家志望の武居千春と結婚。 巽聖歌宅から近くの外語の寮へ移る。
10月	東京市域拡張により中野町と野方町が合併して中野区創設。
昭和8(1933)年2月	小林多喜二虐殺。
3月	日本、国際連盟脱退を通告。 北原白秋と鈴木三重吉が訣別、この年の4月号を最後に『赤い鳥』への寄稿を止める。
5月	寮から中野区新井の川村宅へ移る。
9月	宮澤賢治死去。
12月	『手袋を買いに』を創作。
昭和9(1934)年1月	長男・坎彦(いりひこ)誕生。
2月	第1回「宮澤賢治友の会」に参加。その9日後、初めての嗜血。
11月	ベーブルース来日。
昭和10(1935)年2月	天皇機関説問題。
3月	ドイツ軍備宣言。 『乳樹』19号で終刊。 北原白秋主催の短歌雑誌「多磨」の同人となる。

8月	恋人の木本咸子と別れ、詩「墓碑銘」、小説「鴛鴦」などを契機とした作品を創作。
昭和 11(1938)年2月	二・二六事件。
3月	東京外国語学校を卒業。東京商工会議所内の東京土産品協会に就職。
6月	鈴木三重吉死去。
10月	南吉2回目の咯血。 『赤い鳥』廃刊。
11月	帰郷し、静養に努める。
昭和 12(1937)年	佐藤義美、与田準一らと「幼年文芸サークル」結成。
1～3月	病気に悩む。
4月	河和第一尋常高等学校（現・美浜町立河和小学校）の代用教員となる。
7月	盧溝橋事件（日中戦争始まる）
11月	日独伊防協定調印。
昭和 13(1938)年4月	恩師の遠藤慎一、佐治克巳の計らいで、佐治が校長を務める安城高等女学校（現・愛知県立安城高等学校）の正教員となる。
4月	国家総動員法公布。
昭和 15(1940)年	「多磨」全国大会のため白秋らと東北旅行中、白秋夫妻が日詰に来て一泊し、聖歌の母と会う。
6月	ドイツ軍、パリ入城。
11月	紀元二六〇〇年記念式典。
昭和 16(1941)年1～3月	学習社の依頼で良寛の伝奇物語を執筆。無理がたたって体調を崩し、弟宛に遺言状を書く。12月には血尿が出る。
9月	長女・やよひ誕生。
12月	真珠湾攻撃（太平洋戦争始まる）。 童謡「たきび」がラジオ放送されるも、軍部に差し止められる。
昭和 17(1942)年1月	母トメ死去。
1月	腎臓を患い入院。
4月	米軍機が本土初空襲。
6月	ミッドウェー海戦。

10月	聖歌の世話により初の童話集『おじいさんのランプ』が出版される。
12月	北原白秋死去。
昭和 18(1943)年 1月	病状悪化。
2月	長期欠勤のため安城高等女学校を退職。
12日	未発表作品を巽聖歌に送り、死後の出版を依頼。
14日	父宛に遺言状を書く。
	新美南吉から最後の手紙を受け取り、南吉の郷里半田へ駆けつけ看病する。
3月 22日	咽頭結核のため死去。
4月	自宅（離れ）で葬儀が行われ、東京から巽聖歌や与田準一が参列。
	山本元帥戦死。
5月	アッツ島玉砕。
10月	学徒出陣。
昭和 19(1944)年	岩手県沼宮内町（現岩手町沼宮内）愛宕に家族を連れ疎開。翌年、沼宮内で終戦を迎える。
昭和 21(1946)年 1月	盛岡で短歌誌『新樹』創刊。6月、岩手児童文化協会設立事務長就
12月	新美南吉童話集『九助君の話』編集発行。
昭和 23(1948)年 7月	岩手児童文化協会の事務所が火災で焼失。10月、家族を連れて東京都日野市に移住。
11月	極東国際軍事裁判判決。
昭和 25(1950)年	童話と童謡集『きつねのおめん』刊行。
9月	『新樹』27号で終刊。
昭和 31(1956)年	「ごんぎつね」が小学四年生教科書に初採用。
10月	第二次中東戦争。
昭和 34(1959)年	『日本児童文学』に「新美南吉の手紙と生涯」連載。
3月	新美南吉の 17 回法要参列。
4月	皇太子成婚式。
昭和 35(1960)年	『新美南吉全集』全三巻刊行。この頃校歌作詞や講演等で各地を旅行。

6月	安保条約反対デモ。
昭和 36(1961)年	『新美南吉全集』が産経児童出版文化賞を受賞。 半田市の雁宿公園の新美南吉文学碑の除幕式に参列。
4月	ソ連、初の有人宇宙飛行成功。
昭和 37(1962)年	『新美南吉の手紙と生涯』、新美南吉詩集『墓碑銘』刊行。
昭和 40(1965)年 2月	ベトナムで米軍北爆開始。 巽聖歌・滑川道夫編の『新美南吉全集』全八巻を牧書店より刊行。
12月	胸部疾患のため入院。翌年9月退院。
昭和 45(1970)年	『日本児童文学』に「新美南吉十七歳の作品日記」解説を連載。
10月	胃潰瘍のため入院、手術。12月に退院。
昭和 46(1971)年	『新美南吉十七歳の作品日記』を牧書店から刊行。赤い鳥文学賞選考委員に委嘱される。
昭和 48(1973)年4月 24日	心不全のため、日野市立病院で死去。
6月	岩手県紫波町で「巽聖歌先生を偲ぶ会」が開催される。
10月	オイルショック。

参考文献 『巽聖歌の詩と生涯』 内城弘隆編著・ツーワンライフ、2007

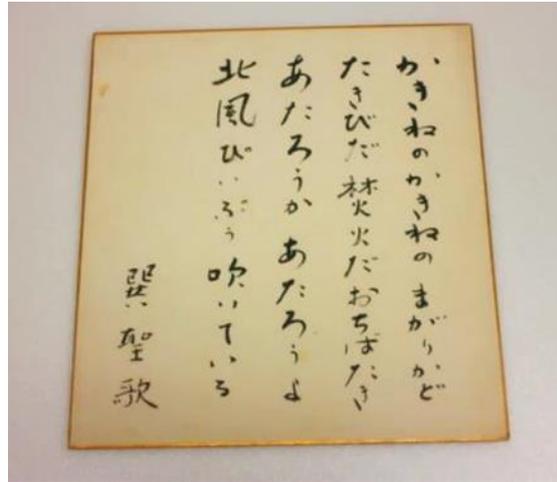
『生誕百年 新美南吉』 新美南吉記念館編・新美南吉記念館、2012

『中野区政概要（平成 23 年度版）』 中野区、2012

ガラスケース展示風景



正面玄関前ガラスケース



巽聖歌自筆色紙「たきび」 提供：日野市郷土資料館



展示横ガラスケース



ガラスケース内展示資料 1

提供：東京都立図書館



(右)『新美南吉を編む 二つの全集とその周辺』

保坂重政/著 アリス館 2000年

(左)『新美南吉の手紙とその生涯』異聖歌/著 英宝社 1962年



『父・白秋の周辺』北原隆太郎/著 短歌新聞社 2007年



(右)『[児童文学]をつくった人たち6 [赤い鳥]をつくった鈴木三重吉
一創作と自己・鈴木三重吉』鈴木三重吉・小島政二郎/著

ゆまに書房 1998年

(左)『鈴木三重吉 日本児童文化運動の先覚者 「綴方読本」と「赤い鳥」』
鈴木三重吉赤い鳥の会 1975年

『與田準一の戦中と戦後』本間千裕/著 高文堂出版社 2006年



『新美南吉紹介』帯金充利/著 三一書房 2001年



ガラスケース内展示資料2

提供：日野市郷土資料館

『きつねのおめん』 巽聖歌/著 海住書店 1951年



『おぢいさんのランプ』 新美南吉/著 有光社 1942年



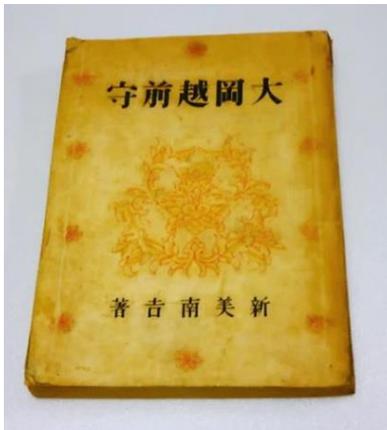
『春の神様』 巽聖歌/著 有光社 1940年



『雪と驢馬』 巽聖歌/著 アルス 1931年



『大岡越前守』 新美南吉/著 学習社 1944年



(右)『チチノキ』第十六冊 与田準一/編 チチノキ社 1933年

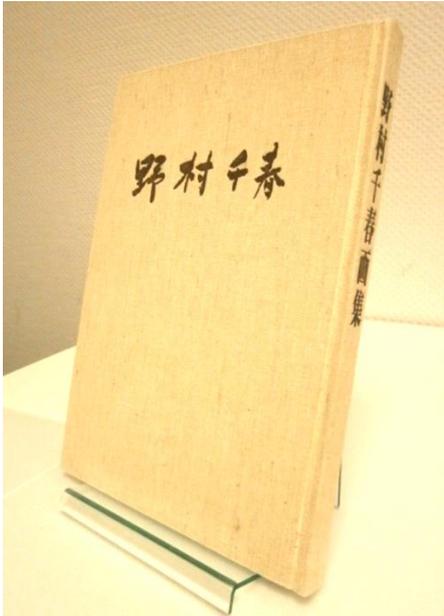
(左)『チチノキ』第十九冊 与田準一/編 チチノキ社 1935年

『新児童文化』第1冊 巽聖歌/編 有光社 1940年



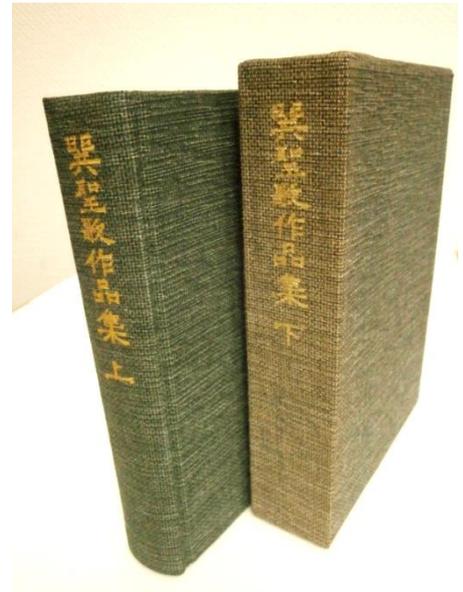


ガラスケース内展示資料3



『野村千春画集』野村千春/著 中央企画 1981

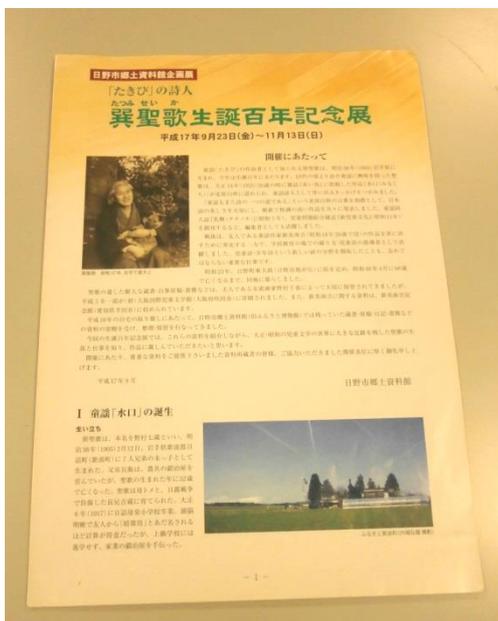
提供：個人蔵



(左)『巽聖歌作品集 上巻』巽聖歌/著 巽聖歌作品集刊行委員会 1977年

(右)『巽聖歌作品集 下巻』巽聖歌/著 巽聖歌作品集刊行委員会 1977年

提供：個人蔵



『巽聖歌生誕百年記念展：「たきび」の詩人：日野市郷土資料館企画展』

日野市郷土資料館/編 2005年

『異聖歌と新美南吉～友情と名作を育てた上高田～』関係資料リスト（区内図書館所蔵資料）

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

◆異聖歌◆

★	近代日本児童文学史研究	鳥越信/著	おうふう	1994	910.2/ト	児研	
★	童謡論の系譜	畑中圭一/著	東京書籍	1990	911.58/ハ	一般	
☆	日本のうた こころの歌	デアゴスティーニ・ジャパン/編	デアゴスティーニ・ジャパン	2008	Q71/A	一般	禁帯
★	異聖歌の詩と生涯	内城弘隆/編著	ツーンライフ	2007	911.58/タ	一般	
★	日本の童謡 誕生から九〇年の歩み	畑中圭一/著	平凡社	2007	911.58/ハ	一般	
★	唱歌・童謡ものがたり	読売新聞文化部/著	岩波書店	1999	767.7/ヨ	閉架	
★	児童読物に関する100の質問	坪田譲治/編 国分一太郎/編	中央公論社	1957	019.5/ツ	閉架	
★	赤い鳥名作集		中央公論社	1988	913.6/アカ	閉架	
☆	雪と驢馬（復刻版）	異聖歌/著	大空社	1997	911.58/タ	一般	禁帯
☆	新美南吉十七歳の作品日記（近代作家研究叢書141）	異聖歌/著	日本図書センター	1993	910.26/タ	一般	禁帯
★	せみを鳴かせて 新版	異聖歌/作 こさかしげる/絵	大日本図書	1990	911/タ/空	児童・閉架	
★	新井・上高田 中野区民俗調査第2次報告	中野区教育委員会/編	中野区教育委員会	1999	P2/A	一般・閉架	
★	「赤い鳥」第12巻第4号（大正13年4月号）	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29/12-4	一般・閉架	
★	「赤い鳥」第13巻第1号（大正13年7月号）	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29/13-1	一般・閉架	
★	「赤い鳥」第15巻4号（大正14年10月号）	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29/15-4	一般・閉架	

◆新美南吉◆

★	生誕百年 新美南吉	新美南吉記念館/編	新美南吉記念館	2012	910.268/ニイ	児研	
★	新美南吉・青春日記 1933年東京外語時代	新美南吉/著 渡辺正男/編	明治書院	1985	915.6/ニイ	一般・閉架	
★	南吉童話の成立と展開	続橋達雄/著	大日本図書	1983	910.268/ニイ	児研	
★	ごんぎつねのふるさと 新美南吉の生涯 改訂版	大石源三/著	エフエー出版	1993	910.268/ニイ	一般	
★	名作童話・新美南吉30選	新美南吉/著 宮川健郎/編	春陽堂書店	2009	913.6/ニイ	一般	
★	徹底比較 賢治 VS 南吉	日本児童文学者協会/編	文溪堂	1994	910.26/ミ	児研	
★	新美南吉童話集（岩波文庫）	新美南吉/著 千葉健二/編	岩波書店	1996	913.6/ニイ	一般	
★	南吉童話の散歩道 改訂増補版	小野敬子/著	中日出版社	1998	910.268/ニイ	児研	
★	文学探訪 新美南吉の世界	続橋達雄/[ほか著]	蒼丘書林	1987	910.268/ニイ	一般	
★	花をうめる（新美南吉童話傑作選）	新美南吉/作 杉浦範茂/絵	小峰書店	2004	913/ニ/黄	児童	
★	ごんぎつね・張紅倫（赤い鳥名作童話10）	新美南吉/著 斎藤博之/絵	小峰書店	1982	913/ニ/10/黄	児童・閉架	
★	新美南吉 詩碑の散歩道	小野敬子/著	中日出版社	2008	910.268/ニイ	一般	
★	赤い鳥名作集		中央公論社	1988	913.6/アカ	閉架	
★	児童文学 鑑賞日本現代文学35	鳥越信/編	角川書店	1982	909/ト	児研	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
★	校定 新美南吉全集 第1巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/1	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第2巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/2	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第3巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/3	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第4巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/4	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第5巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/5	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第6巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/6	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第7巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/7	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第8巻	新美南吉/著	大日本図書	1981	918.68/ニイ/8	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第9巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/9	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第10巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/10	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第11巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/11	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 第12巻	新美南吉/著	大日本図書	1980	918.68/ニイ/12	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 別巻1	新美南吉/著	大日本図書	1983	918.68/ニイ/B-1	一般・閉架	
★	校定 新美南吉全集 別巻2	新美南吉/著	大日本図書	1983	918.68/ニイ/B-2	一般・閉架	
★	新編 新しい国語 三年 下	角野栄子/[ほか著]	東京書籍	2008	375/シ	一般・閉架	
★	新編 新しい国語 四年 下	角野栄子/[ほか著]	東京書籍	2008	375/シ	一般・閉架	
★	もっと読みたいおはなし絵本100	鳥越信/編	平凡社	2005	019.5/モ	児研	
★	時代の証人 新美南吉	かつおきんや/著	風媒社	2013	910.268/ニイ	一般	
★	新美南吉〈ごんぎつね〉〈手袋を買いに〉そして〈でんでんむしのかなしみ〉悲哀と愛の童話作家 生誕一〇〇年記念	坂塚重政/監修 遠山光嗣/監修	平凡社	2013	910.268/ニイ	一般	
★	素顔の新美南吉 避けられない死を前に	斎藤卓志/著	風媒社	2013	910.268/ニイ	一般	
★	「赤い鳥」復刻第3巻第1号(昭和7年1月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぷ(発売)	1981	918.8/A29A/3-1	一般・閉架	
☆	新美南吉記念館研究紀要 5号	新美南吉記念館/編	新美南吉記念館	1999	910.268/ニイ/5	一般	禁帯
☆	新美南吉記念館研究紀要 7号	新美南吉記念館/編	新美南吉記念館	2001	910.268/ニイ/7	一般	禁帯
☆	新美南吉記念館研究紀要 9号	新美南吉記念館/編	新美南吉記念館	2003	910.268/ニイ/9	一般	禁帯
☆	新美南吉記念館研究紀要 11号	新美南吉記念館/編	新美南吉記念館	2005	910.268/ニイ/11	一般	禁帯

◆北原白秋◆

★	フレップ・トリップ (岩波文庫)	北原白秋/著	岩波書店	2007	915.6/キタ	一般	
★	北原白秋	三木卓/著	筑摩書房	2005	911.52/キ	一般	
★	日本童謡ものがたり	北原白秋/著	河出書房新社	2003	388.9/キ	一般	
★	赤い鳥小鳥(北原白秋童謡詩歌集)	北原白秋/著 北川幸比古/責任編集	岩崎書店	1997	911.0/キ	一般・閉架	
★	白秋の水脈	北原東代/著	春秋社	1997	911.52/キ	一般・閉架	
★	白秋片影	北原東代/著	春秋社	1995	911.52/キ	一般・閉架	
★	北原白秋 (文芸読本)		河出書房新社	1980	911.52/キ	一般・閉架	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
★	からたちの花がさいたよ (北原白秋童謡選)	北原白秋/著 与田準一/編	岩波書店	1990	911/キ	児童	
★	北原白秋 生ひたちの記・雀と人間の愛 (作家の自伝27)	北原白秋/著	日本図書センタ ー	1995	910.268/キタ	一般	
★	北原白秋の世界 その世紀末的詩境の考察	河村政敏/著	至文堂	1997	911.52/キ	一般・ 閉架	
★	白秋全童謡集Ⅰ	北原白秋/著	岩波書店	1992	911.58/キ/1	一般・ 閉架	
★	白秋全童謡集Ⅱ	北原白秋/著	岩波書店	1992	911.58/キ/2	一般・ 閉架	
★	白秋全童謡集Ⅲ	北原白秋/著	岩波書店	1992	911.58/キ/3	一般・ 閉架	
★	白秋全童謡集Ⅳ	北原白秋/著	岩波書店	1993	911.58/キ/4	一般・ 閉架	
★	白秋全童謡集Ⅴ	北原白秋/著	岩波書店	1993	911.58/キ/5	一般・ 閉架	

◆鈴木三重吉◆

★	鈴木三重吉への招待	鈴木三重吉赤い 鳥の会/編	教育出版センタ ー	1982	910.268/スズ	一般・ 閉架	
★	赤い鳥翔んだ 鈴木すずと父三重吉	脇坂るみ/著	小峰書店	2007	913.6/ワキ	YA・ 閉架	
★	鈴木三重吉童話集 (岩波文庫)	鈴木三重吉/著 勝尾金弥/編	岩波書店	1996	913.6/スズ	一般・ 閉架	
★	『赤い鳥』と鈴木三重吉	赤い鳥の会/編	小峰書店	1983	910.268/スズ	一般・ 閉架	
★	鈴木三重吉と「赤い鳥」	根本正義/著	鳩の森書房	1973	910.268/スズ	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」童謡 第1集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1919	911.5/ア/1	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第2集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1920	911.5/ア/2	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第3集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1920	911.5/ア/3	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第4集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1921	911.5/ア/4	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第5集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1921	911.5/ア/5	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第6集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1922	911.5/ア/6	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第7集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1923	911.5/ア/7	児研	
★	「赤い鳥」童謡 第8集(復刻版)	鈴木三重吉/編	赤い鳥社	1925	911.5/ス/8	児研	

◆鈴木三重吉◆

★	鈴木三重吉全集 第1巻	鈴木三重吉/著	岩波書店	1982	918.68/スズ/1	一般・ 閉架	
★	鈴木三重吉全集 第2巻	鈴木三重吉/著	岩波書店	1982	918.68/スズ/2	一般・ 閉架	
★	鈴木三重吉全集 第3巻	鈴木三重吉/著	岩波書店	1982	918.68/スズ/3	一般・ 閉架	
★	鈴木三重吉全集 第4巻	鈴木三重吉/著	岩波書店	1982	918.68/スズ/4	一般・ 閉架	
★	鈴木三重吉全集 第5巻	鈴木三重吉/著	岩波書店	1982	918.68/スズ/5	一般・ 閉架	
★	鈴木三重吉全集 第6巻	鈴木三重吉/著	岩波書店	1982	918.68/スズ/6	一般・ 閉架	

◆与田準一◆

★	与田準一論 童謡と少年誌	畑島喜久生/著	リトル・ガリヴァ ー社	2000	910.268/ヨダ	児研	
★	日本童謡集 (ワイド版岩波文庫)	与田準一/編	岩波書店	1994	911.58/ニ	一般	
★	詩と童話について	与田準一/著	すばる書房	1976	911.58/ヨ	一般・ 閉架	

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
★	青い鳥・赤い鳥	与田準一/著	講談社	1980	909/ヨ	一般・閉架	
★	赤い鳥を追って 鈴木三重吉賞特選抄	坪田譲治/編 与田準一/編	文化評論出版	1980	816/ツ/空	児童・閉架	
★	講座日本児童文学第八巻 日本の児童文学作家3	猪熊葉子[ほか]/編	明治書院	1973	909/コ/8	一般・閉架	
★	与田準一全集 第1巻 童話集	与田準一/著	大日本図書	1967	913/ヨ/1/黄	児童・閉架	
★	与田準一全集 第2巻 詩集	与田準一/著	大日本図書	1967	918/ヨ/2/黄	児童・閉架	
★	与田準一全集 第3巻 幼年童話集(1)	与田準一/著	大日本図書	1967	918/ヨ/3/黄	児童・閉架	
★	与田準一全集 第4巻 幼年童話集(2)	与田準一/著	大日本図書	1967	918/ヨ/4/黄	児童・閉架	
★	与田準一全集 第5巻 童話集(1)	与田準一/著	大日本図書	1967	918/ヨ/5/黄	児童・閉架	
★	与田準一全集 第6巻 童話集(2)	与田準一/著	大日本図書	1967	918/ヨ/6/黄	児童・閉架	

◆柴野民三◆

★	馬ののったかみなり (メモワール文庫)	柴野民三/著	さえら書房	1973	388/シ/紺	児童・閉架	
★	かまきりおばさん	柴野民三/著 阿部肇/絵	国土社	1976	911/シ/空	児童・閉架	
★	ねずみ火花 童話集	柴野民三/文 茂田井武/絵	ビリケン出版	2008	913/シ/黄	児童	
★	山ねこホテル 絵童話	柴野民三/文 茂田井武/絵	ビリケン出版	2009	913/シ/黄	児童	
★	山ねこせんちょう	柴野民三/文 茂田井武/絵	九月館(発行) 集文社(発売)	1992	E/モタ/赤	児童・閉架	
★	ひまわり川の大くじら	柴野民三/作 北田卓史/絵	岩崎書店	1974	913/シ/黄	児童・閉架	
★	子どもの伝記全集 コロンブス	柴野民三/著	ポプラ社	1978	288/コ/灰	児童・閉架	

◆荻田義雄◆

★	わらべ唄考	荻田義雄/著	カワイ楽譜	1961	388.9/ヤ	一般・閉架	
★	評伝 北原白秋 増補改訂	荻田義雄/著	玉川大学出版部	1978	911.5/キ	一般	
★	日本伝承童謡集成 第2巻	北原白秋/編 荻田義雄/編纂校 訂責任	三省堂	1974	911.58/ニ/2	一般・閉架	
★	日本伝承童謡集成 第3巻	北原白秋/編 荻田義雄/編纂校 訂責任	三省堂	1975	911.58/ニ/3	一般・閉架	
★	日本伝承童謡集成 第4巻	北原白秋/編 荻田義雄/編纂校 訂責任	三省堂	1975	911.58/ニ/4	一般・閉架	
★	日本伝承童謡集成 第5巻	北原白秋/編 荻田義雄/編纂校 訂責任	三省堂	1975	911.58/ニ/5	一般・閉架	
★	日本伝承童謡集成 第6巻	北原白秋/編 荻田義雄/編纂校 訂責任	三省堂	1976	911.58/ニ/6	一般・閉架	

◆大木惇夫◆

★	大木惇夫/蔵原伸二郎 (近代浪漫派文庫)	大木惇夫/著 蔵原伸二郎/著	新学社	2005	911.56/オ	一般	
★	酒の詩歌十二ヶ月	大木惇夫/著	経済往来社	1957	911.56/オ	一般・閉架	
★	ネコノシッコ ポルトガルノオハナシ (復刻絵本絵ばなし集)	大木惇夫/著	ぼるぶ社	1978	E/フク/26/赤	児童・閉架	
★	ミエバウノヒヨッコ (復刻絵本絵ばなし集)	大木惇夫/著	ぼるぶ社	1978	E/フク/25/赤	児童・閉架	
★	マメノコブタイ (復刻絵本絵ばなし集)	大木惇夫/著	ぼるぶ社	1978	E/フク/29/赤	児童・閉架	
☆	学校要覧 江原の教育	中野区立江原小学校/編	中野区		J8/A	一般・閉架	禁帯

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

◆宮柵二◆

★	宮柵二青春日記	宮柵二/著 宮英子/編	本阿弥書店	1992	915.6/ミヤ	一般	
★	砲火と山鳩 宮柵二・愛の手紙	宮柵二/著	河出書房新社	1988	918.6/ミヤ	一般	
★	宮柵二とその時代	小高賢/著	五柳書院	1998	911.16/ミ	一般	
★	宮柵二 (短歌シリーズ人と作品 19)	島田修二/著	桜楓社	1980	911.16/タ/19	一般・ 閉架	
★	宮柵二歌集 (岩波文庫)	宮柵二/著 宮英子・高野公彦/編	岩波書店	1992	911.16/ミ	一般・ 閉架	
★	歌集 山西省 (短歌新聞社文庫)	宮柵二/著	短歌新聞社	1995	911.16/ミ	一般・ 閉架	

◆清水たみ子◆

★	かたつむりの詩 清水たみ子詩集	清水たみ子/著 内山懋/画	かど書房	1990	911/シ/空	児童・ 閉架	
★	交響曲の父ハイドゥン <ジュニア音楽図書館 作曲家シリーズ14>	清水たみ子/文 加納美年子/絵	音楽之友社	1982	732/ジ/14/橙	児童・ 閉架	
★	へんしんキャンディー	日本児童文学者 協会/編	童心社	1996	913/オ/黄	児童・ 閉架	
★	あまのじゃく	清水たみ子/著 深沢邦朗/絵	国土社	1979	911/シ/空	児童・ 閉架	
★	かみなりさまとくわのき	清水たみ子/文 安井康二/画	教育画劇	1981	K/カ/青	児童	
★	せむしのこうま 前・後編	エルゾーフ/原作 エ ム・ナエ/画 清水たみ子/脚色	教育画劇	1980	K/セ/黄緑	児童・ 閉架	
★	むかしむかしおにがきた	清水たみ子/作 安井康二/画	教育画劇	1978	K/ム/黄	児童	

◆歌見誠一◆

★	「赤い鳥」復刊第2巻第1号(昭和6年7月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/2-1	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第2巻第3号(昭和6年9月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/2-3	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第2巻第4号(昭和6年10月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/2-4	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第2巻第5号(昭和6年11月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/2-5	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第2巻第5号(昭和6年12月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/2-6	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第3巻第2号(昭和7年2月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/3-2	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第3巻第3号(昭和7年3月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/3-3	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第3巻第5号(昭和7年5月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/3-5	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第3巻第6号(昭和7年6月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/3-6	一般・ 閉架	
★	「赤い鳥」復刊第4巻第6号(昭和7年12月号)	鈴木三重吉/主幹	日本近代文学館 ほるぶ(発売)	1981	918.8/A29A/4-6	一般・ 閉架	

◆江口榛一◆

★	地の塩の人 江口榛一私抄	吉田時善/著	新潮社	1982	911.5/エ	一般・ 閉架	
★	昭和46年版 文学選集36	日本文芸家協会/ 編	講談社	1971	913.68/ブ/36	一般・ 閉架	

◆河合弘◆

★	友、新美南吉の思い出	河合弘/著	大日本図書	1983	910.268/ニイ	一般・ 閉架	
---	------------	-------	-------	------	------------	-----------	--

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

◆野村千春◆

★	たのしい詩・考える詩	巽聖歌/編著 野村千春/挿絵	アリス館	1983	911/タ/水	児童・ 閉架	
---	------------	-------------------	------	------	---------	-----------	--

◆中川一政◆

★	中川一政画文集 独り行く道	中川一政/著	求竜堂	2011	723.1/ナ	一般	
★	中川一政 いのち弾ける!	中川一政/著	二玄社	1996	723.1/ナ	一般	
★	孤高の画人 (日経ビジネス人文庫 私の履歴書)	熊谷守一・中川一政・東郷青児・棟方志功/著	日本経済新聞社	2007	723.1/コ	一般	
★	画にもかけない	中川一政/著	講談社	1984	914.6/ナカ	一般・ 閉架	
★	腹の虫	中川一政/著	日本経済新聞社	1975	723.1/ナ	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第1巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/1	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第2巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/2	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第3巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/3	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第4巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/4	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第5巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/5	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第6巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/6	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第7巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/7	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第8巻	中川一政/著	中央公論社	1986	720.8/ナ/8	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第9巻	中川一政/著	中央公論社	1986	720.8/ナ/9	一般・ 閉架	
★	中川一政全文集 第10巻	中川一政/著	中央公論社	1987	720.8/ナ/10	一般・ 閉架	

◆渡辺茂◆

★	渡辺茂のオリジナル保育ソング その2	渡辺茂/著	小学館	1981	767/ワ/橙	児童・ 閉架	
★	NHK うたのおばさん楽譜集	日本放送出版協会/編	日本放送出版協会	1957	767.7/ニ	一般・ 閉架	
★	大人のための教科書の歌	川崎洋/著	いそつぶ社	1998	767.7/カ	一般・ 閉架	
★	心にのこる 日本の歌101選	長田暁二/著	ヤマハミュージックメディア	2007	767.7/オ	一般・ 閉架	
★	カワイの絵本童謡4 夕焼小焼	友竹正則/おはなし	河合楽器製作所・出版事業部	1990	767/ト/橙	児童・ 閉架	
★	カワイの絵本童謡9 小鳥のうた	友竹正則/おはなし	河合楽器製作所・出版事業部	1990	767/ト/橙	児童・ 閉架	
★	1ねんせいになったら (うたのほん)	まど・みちお/詩 長新太/絵	理論社	1996	767.7/マ	一般	
★	たのしいこどものうた600選 全曲楽譜付		自由現代社	1997	767.7/タ	一般・ 閉架	
★	絵でとく日本の歌	長田暁二/監修 岸大武郎・池田八重子・おかもと香織/絵	ヤマハミュージックメディア	2009	737/エ/橙	児童	
★	童謡 改版	野ばら社編集部/編 久保昭二/編	野ばら社	2010	767.7/ド	一般	
★	童謡・唱歌・こころの歌	西東社編集部	西東社	2010	767.7/ド	一般	
★	あしたへ贈る歌2 (由紀さおり・安田祥子こころの音楽教科書)		小学館	2008	767.7/ア/2	一般	
☆	わらべ 上高田グラフィティ	中野区上高田地域センター/編	中野区	1989	B10/A/89	一般	禁帯

展示	書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	形態	禁帯
----	----	-----	-----	-----	------	----	----

◆初山滋◆

★	智とカ兄弟の話 青木茂お話集 (名著復刻日本児童文学館第2集-[13])	青木茂/著 初山滋/画	ぼるぷ出版	1977	918.6/メ/2-13	一般・ 閉架	
★	うたの絵本6 はる・なつ・あき・ふゆ	初山滋/絵	リポート	1985	767/ウ/6/橙	児童・ 閉架	
★	うたの絵本9 わらべうた	初山滋/絵	リポート	1986	767/ウ/9/橙	児童・ 閉架	
★	たべるトンちゃん (名著復刻日本児童文学館名作選21)	初山滋/著	ぼるぷ出版	1984	918/メ/21/黄	児童・ 閉架	
★	一寸法師 (コドモエホンブンコ)	初山滋/画	ぼるぷ出版	1978	E/フク/23/赤	児童・ 閉架	
★	初山滋童画集 第1輯 (復刻絵本絵ばなし集)	初山滋/画	ぼるぷ出版	1978	E/フク/37/赤	児童・ 閉架	
★	初山滋作品集 国際版	初山滋/著	講談社	1974	726.5/ハ/大型	一般	

◆その他参考文献◆

	「赤い鳥」復刻版 解説・執筆者索引		日本近代文学館 ぼるぷ(発売)	1981	918.8/A29/S	閉架	
	児童文学研究 解説・総目次	日本児童文学学 会/編	日本児童文学学 会 久山社(発 売)	1994	910/ジ	児研	
	中野区の30年	中野区役所/編	中野区	1962	N1/A	一般・ 閉架	禁帯
	鉄道にみる中野の歴史 平成10年10月 10周年特別企画展	中野区歴史民俗 資料館/編	中野区	1998	E/85/A	一般・ 閉架	
	日本児童文学大事典 第1巻	大阪国際児童文 学館/編	大日本図書	1993	909.03/オ/1	児研	
	日本児童文学大事典 第2巻	大阪国際児童文 学館/編	大日本図書	1993	909.03/オ/2	児研	

◆雑誌掲載資料◆

展示	書名	出版年
★	日本児童文学 1973年3月号(私の処女作「山羊と善兵エさんの死」/巽聖歌)	1973
★	日本児童文学 1973年5月号(「初山滋先生の思い出/岡本文弥・川本哲夫・久保雅勇・武市八十雄、堀尾青史・与田準一・巽聖歌)	1973
★	日本児童文学 1973年8月号(特集2 巽聖歌追悼)	1973
★	日本児童文学 1982年5月号(特集:現代日本の童謡詩人(人と作品)柴野民三論、清水たみ子論、与田準一論、ほか)	1982
★	日本児童文学 1993年3月号(インタビュー:新美南吉の思い出を清水たみ子さんに聞く)	1993
★	日本児童文学 2003年7-8月号(《新美南吉研究の現在》「南吉をめぐる二十年」/遠山光嗣)	2003
★	児童文芸 2013年6-7月号(特集:生誕百年 詩人 新美南吉をたずねて)	2013

資料協力

日野市郷土資料館・新美南吉記念館・東京都立図書館・中野区政策室広報分野

中野区立中央図書館企画展示 中野区ゆかりの著作者紹介・第10回

巽聖歌と新美南吉 一友情と名作を育んだ上高田一

発行年月日 2014年2月20日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷物番号 25指中教図中第408号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9番7号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090



中野区立中央図書館

<http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/>